『源氏物語』における出家

西田禎元

『源氏物語』の主要人物の中で、出家した人と、出家はしなかったが、出家への意志もしくは関心を示していた人は結構多いといえる。

物語に登場した時点で仏門に入っていた明石入道や幾人かの尼君達は除くとしても、表Ⅰに示す人物は、その生涯において落飾している。

(7)紫上と(10)宇治八宮との場合であるが、前者は死の直前において髪をおろされ、後者は死に先立つ旬日前に家を出て念仏三昧の山寺生活に入った。従って、ここでは、両者とも入道出家したと解することにした。

更にまた、源氏の場合であるが、彼の生存中に出家し

(表Ⅰ)

人物	巻名	主な動機	年齢	没年
(1)藤壺宮	賢木	愛執	29歳	37歳
(2)六条御息所	澪標	疾病	36	36
(3)空蟬	関屋	愛執		
(4)朧月夜君	若菜下	孤独		
(5)朝顔斎院	若菜下	孤独		
(6)女三宮	柏木	疾病	22〜3	43
(7)紫上	御法	疾病	43	
(8)浮舟	手習	愛執	22	
(9)朱雀院	若菜上	疾病	42	
(10)宇治八宮	椎本	疾病	53	55〜6?
(11)光源氏	(雲隠)	孤独		

たという叙述はないが、彼の死後において、薫の回想譚の中で、源氏の出家が物語られていることがわかる。

故院のうせたまひてのち、二三年ばかりの末に、世をそむきたまひし嵯峨の院にも、六条の院にも、さしのぞく人の、心をさめむ方なくなむはべりける（宿木巻、第十一巻126ページ）[1]

とするならば、源氏もまた出家者として数えてよい。

次に、出家はしなかったが、出家の意志を示していた人物は次の通りである。

（表Ⅱ）

人物	巻名	人物	巻名
①明石君	若菜上	②秋好中宮	鈴虫
③落葉宮	夕霧	④玉鬘	竹河
⑤大君	総角	⑥薫	匂宮

こうしてみると、夕顔君や葵上のように、比較的若くして死んだ者を除いて、女性の主要人物の殆どが出家をするか、出家への意志を示していることがわかる。

『源氏物語』以前の物語や日記文芸にあって、主要人物の出家が記されていたのは、『多武峯少将物語』（『高光日記』ともいう）ぐらいであった。あとは、『宇津保物語』の例に見られるように、登場人物の一人でしかない端役が、〈貴宮〉という人物に対する失恋が動機で出家している程度である。

それでは『源氏物語』以後はどうかというと、たしかに、以前と比較して、出家した主要人物を描いたものは多い。

『狭衣物語』の〈女二宮〉、『浜松中納言物語』の〈大姫〉、『夜の寝覚』の〈寝覚上〉などヒロインやそれに準ずる女君が出家している。

また、出家の意志を示している人物に、『狭衣物語』の主人公、『浜松中納言物語』の主人公、『とりかへばや物語』の主人公など、『源氏物語』の影響は明らかである。

しかし、作品の分量の違いもあるとはいえ、『源氏物語』のように、主人公も含めて女主人公やそれに準ずる人物の殆どが出家落飾したという物語はない。『源氏物語』はやはり、仏教という思想、情緒を除いては語れないといっても過言ではない。

ところで、『源氏物語』でもそれ以後の物語でも、女性の出家が多かった。このことは何を意味しているのであろうか。たしかに、次のような総じての意味もあるかもしれない。

観念的になりやすい男の心と、融和的な女の心の対照がここに示される。（中略）この融和的な女人のほうが数多く出家生活に入っている。現実の生活にめぐまれて栄花のただなかにある男性には、自然な出家の心の芽ばえることは少なく、結局は観念の中で願われるものであったのであろうか[2]

これとともに、右の指摘にある「現実の生活にめぐまれて栄花のただなかにある男性」ではなくて、〈現実の生活にめぐまれないで、栄花のただなかにいない女性〉だからこそ、出家への道がより易く開けていったのであろう。すなわち、〈現実の生活にめぐまれない〉ということは、主として、男に対する女の人生を意味しているのであり、男の愛情に包まれて生ききれなかった女の、不如意な人生を基点にしたものであろうし、〈栄花のただなかにいない〉ということは、男性のように官吏生活をしていない女性の生活としては当然の帰結である。宮仕えをした女性達の人生は特殊なのである。

こうした女人通有の出家への意志は、当時一般に見られた法華経享受のあり方、就中、女人往生（成仏）を説いている〈提婆達多品〉（法華経五の巻）の支持と決して無関係ではない。

〈八代集〉に見られる釈教歌で最も多いのは、この提婆品を素材にしたものであり、『梁塵秘抄』という平安末期の歌謡集においても、提婆品を素材にしたものが最も多い[3]。

また、『更級日記』の中には、作者である菅原孝標女が「法華経五の巻をとくならへ」（日本古典全書、九七ページ）と夢の中で諭されたということを記している。

『源氏物語』にも、女人往生の教理である〈竜女成仏〉に触れたところが幾つか見られる。

(イ)海竜王の后になるべきいつきむすめなり（若紫、第二巻38ページ）

(ロ)海のなかの竜王の、いといたうものめでするものにて、見いれたるなりけり（須磨、第三巻143ページ）

(ハ)五つのなにがしも、なほうしろめたきを、われ、この御みちをたすけて、同じうは後の世をだに、と思ふ（匂宮、第九巻219ページ）

(ニ)竜の中より仏生れたまはずはこそはべらめ、たゞ人にては、いと罪かろきさまの人になむはべりける（手習、第十二巻495ページ）

(イ)、(ロ)は明石君に関しての話であり、(ハ)は出家して罪障消滅を願う女三宮に対する薫の感懐であり、(ニ)は浮舟蘇生の話である。内容の面では(ニ)が最も教理に近い。

女人であるがゆえの不如意な人生は、まさに彼女達の苦悩の人生を意味している。苦悩の人生は煩悩の生である。それゆえに、菩提を求めて出家の道に入るのであろう。

煩悩には愛執の罪ともいうべき愛恋の苦悶もあれば、子供や親などの近しい親族に対する心配りもある。また、自分自身の病気等の悩みもあれば、貴族生活といっても、社会での出世や、経済問題の欲望もあったであろう。

物語に多いのは愛執の煩悩である。ゆえに、一夫多妻制という歴史社会の様式の中では、女性であるがゆえの苦悩が深刻であったし、また、思想的には女性の罪障の深さが説かれ、それゆえの不幸感が一般でもあった。

だから彼女達は、幸せになることを必死に願い、出家入道して菩提の人生を求めようとしたのである。それが最上の人生ではないにしても、それしかなかった最後の人生でもあった。

さて、『源氏物語』の人達は、いかなる動機で出家に踏み切ったのか、それぞれの出家のありようを探ってみることにしよう。

(1) 藤壺宮の場合

世のうとましく、過ぐし難うおぼさるれば、そむきなむ事をおぼしとる（賢木、第二巻556ページ）

〈過ぐし難う世〉とは、桐壺院崩御後における右大臣一派の治世を意味しているであろうし、併せて継子源氏との禁忌の愛恋をも指しているであろう。

これら二つの世間への思いは決して別々のものではなく、以下のように一つに帰結するものである。

すなわち、藤壺宮は出家することにより、自分に対する源氏の恋慕がおさまり、源氏との間になした罪の子である東宮を、源氏が後見人として守ることになり、将来への希望をつなぐことができるのである。

源氏の愛執を断ち切ることが東宮の安泰につながり、やがては東宮の治世の時（藤壺宮と源氏の治世の時でもある）を迎えることが可能になるという。

政略とも、打算とも解され得る国母藤壺中宮の思念であるが、それは決して源氏に対する愛恋の薄情を意味してはいない。後世、源氏が須磨退居をした際、宮の本心は語られているといえる。

御すくせの程をおぼすには、いかゞあさくおぼされむ、（中略）あはれに恋しうもいかゞおぼしいでざらむ（須磨、第三巻80～1ページ）

ともあれ、藤壺宮出家の動機は、東宮を守るという一点から発想された母性愛の結果であり、それは同時に源氏との禁忌の愛恋に終止符を打つことでもあった。

出家することによって、宮は女から母へと変容したといえる。

(2) 六条御息所の場合

にはかに重くわづらひたまひて、物のいと心細く思されければ、罪ふかきほとりに年へつるも、いみじうおぼして、尼になりたまひぬ（澪標、第三巻334ページ）

御息所の出家の動機は、重病と、神社で過した罪を思いやってのものであった。娘の斎宮が伊勢神宮に奉仕していた六年間、母もまた一緒であった。仏教の思想からすれば、仏から遠ざかって神社に仕えることは〈罪〉なのである。

この母親の罪はかなり重かったらしく、出家したあと亡くなってからも、軽くはならなかったようである。そのことは、後になって、娘の斎宮（秋好中宮）によって回想されている。

なき人の御ありさまの、罪軽からぬさまに、ほの聞く事のはべりし（中略）みづからだにかの焔をも、醒ま

しはべりにしがな（鈴虫、第八巻269ページ）

せめて娘の自分が、母親の苦しみを和らげるためにも、出家しようかと思うのである。秋好中宮の出家の意志はここにあった。

ともあれ、御息所は重病の床に臥した時に、今世の罪深き人生を思い、来世に心を向けたのである。

数日の後に、彼女は死んだ。

(3) 空蟬の場合

いとあさましき心の見えければ、うき宿世ある身にて、かく生きとまりてはてくは珍らしき事どもを聞き添ふるかな、と、人知れず思ひ知りて、人にさなむとも知らせで、尼になりにけり（関屋、第三巻457ページ）

関屋の巻の記述によれば、空蟬は、継子紀伊守（現在は河内守）の恋慕からのがれるために出家した。尤も、継子の恋慕が積極的になったというのも、彼女が老夫常陸介に死なれてしまったからである。

禁忌の愛恋という罪からのがれるためにも、空蟬は尼になった。こうした空蟬の場合は、源氏の愛をのがれた藤壺宮の図式に似ている。しかし、同じではない。なぜなら、空蟬の場合には、継子の〈好き心〉を忌避しようという基本的な姿勢が見られるのに対し、藤壺宮の場合には、前にもちょっと触れた通り、自分の息子である東宮の生涯の安泰と繁栄のために、やむなく源氏の愛を拒んだのであった。〈愛を避けること〉と〈愛を抑えること〉とは同じではない。

(4) 朧月夜君の場合

二条の内侍のかんの君をば、なほたえず思ひ出できこえたまへど、（中略）つひに御本意のごとしたまひてけり、と聞きたまひて（若菜下、第七巻467ページ）

彼女の出家を、源氏は後日になって耳にした。彼女が愛人の一人として仕えていた朱雀院が出家した折、彼女もまた入道への意志を示したのであったが〈尼になりなむと思したれど（若菜上、第七巻132ページ）〉、それから八年後に本意を遂げたのである。

父親右大臣は二十年前に亡くなり（明石巻）、母親代わりともいうべき姉弘徽殿大后も八年前に亡くなり（若菜

上巻）、そして夫に相当すべき朱雀院も、既に出家入山の身になって八年、その院も五十歳という老齢に達していた。

そのような縁の人にとって、残されたより充実した人生とは入道生活であった。この出家の叙述を最後に、彼女は物語の世界から姿を消す。

彼女の出家も、或は、〈あるまじき〉源氏との再会（若菜上巻）の罪の意識があってのことかもしれない。朱雀院出家後の彼女は、ずっと独り身であったのだ。

(5) 朝顔斎院の場合

斎院はた、いみじうつとめて、まぎれなくおこなひにしみたまひにたなり（若菜下、第七巻470ページ）

源氏が紫上に語る回想譚の中で、朝顔斎院の入道のさまが述べられる。立派な仏道修行の姿であるという。

この記述からは、出家の動機はわからないが、次に示す朝顔の巻の記述は参考になろう。

年頃しづみつる罪うしなふばかり御行ひを、とは思し立てど、にはかにかゝる御事をしも、もて離れ顔にあらむも、なかく今めかしきやうに見え聞えて、（中略）やうく御行ひをのみしたまふ（第四巻285～6ページ）

六条御息所の場合と同じように、朝顔斎院もまた、長く賀茂神社に奉仕した女性であった。その仏教から離れていた罪を消滅させるためにも、彼女は出家を願っていたようである。併せて、父親が死去したこと（薄雲巻）も動機になったと考えられる。

(6) 女三宮の場合

女三宮が出家を志したのは出産直後のことである。

①さのみこそは、思し隔つることもまさらめ、とうらめしう、わが身つらくて、尼にもなりなばやの、御心つきぬ（柏木、第八巻49ページ）

柏木との間に生まれた男の子を、夫の源氏は可愛がろうとしない。源氏の無言の冷ややかさに、彼女は出家を思う。身体も大分弱まっている昨今である。

彼女は、出家の意志を夫に告げる。

②なほ、え生きたるまじきこゝちなむしはべるを、か

ゝる人は、罪も重かなり、尼になりて、もしそれにや生きとまるとこゝろみ、また、なくなるとも、罪を失ふこともや（柏木、第八巻51ページ）

死んで罪がなくなるということは、出家の功徳による。と同時に、彼女自身が犯してしまった柏木との不義密通の罪も思いやったかもしれない。

ためらう源氏の態度に、彼女は病気見舞いのため下山した父朱雀法皇にも出家の意志を告げる。

③生くべうもおぼえはべらぬを、かくおはしまいたるついでに、尼になさせたまひてよ（柏木、第八巻64ページ）

産後の衰弱を彼女は父親に哀訴する。思案の結果、朱雀法皇は幸薄き娘の落飾を決意した。源氏は反対したが、彼女への愛の深さにおいてまさる法皇の意志が通り、女三宮は落飾した。

④御祈りにさぶらふなかに、やむごとなう尊き限り召し入れて、御髪おろさせたまふ（中略）この世にはかひなきやうにないたてまつるも、あかず悲しければ、うちしほれたまふ（柏木、第八巻72ページ）

それにしても、当時の出家が、「この世にはかひなき」人生であったことは注目してよい。なぜなら、これが出家の限界であり、それはとりもなおさず、そこには真実の救いがありそうもないことを示しているからである。

(7) 紫上の場合

紫上は生前、出家を全うしたわけではない。しかし、出家の意志は死の五年程前から芽生えていた。

①今は、かうおほぞうの住まひならで、のどやかにおこなひをもとなむ思ふ、この世はかばかりと、見はてつるこゝちする齢にもなりにけり（若菜下、第七巻294ページ）

出家をするような年齢にもなったというのであるが、彼女には、養女の明石中宮に男御子が生まれ東宮となった、という安心感もあったであろうし、また、女三宮降嫁後の源氏の愛〈男の愛の問題〉を深く考えざるを得なかったのでもあろう。

②あまり年つもりなば、その御心ばへもつひにおとろへなむ、さらむ世を見はてぬさきに、心と背きにしがな、と、たゆみなく思しわたれど（若菜下、第七巻316ページ）

③いと行く先き少なきこゝちするを、（中略）さきぐも聞ゆる事、いかで御ゆるしあらば、と聞えたまふ（若菜下、第七巻381～2ページ）

たびたび源氏に出家の許可を願っていたが、源氏は紫上と離れることに忍びず、許そうとはしない。こうしているうちに、彼女は発病した。数年前からの心身の疲れが彼女を襲った。病の床で彼女はひたすら出家を願う。それは長い間思い考えてきたことであった。

出家を許さない源氏を恨めしく思う紫上であったが、出家という今生での別れに耐えられない源氏は、依然として彼女の願いを聞き入れない。

やがて、彼女の病は次第に重さを増し、〈物の怪〉のために彼女は一時息絶える。

が、源氏の必死の祈りで紫上は蘇生した。この折に、〈戒〉だけでも受けさせようと、源氏は遂に髪をおろすことを許した。

④御髪おろしてむ、と、せちに思したれば、忌むことの力もやとて、御いたゞき、しるしばかりはさみて五戒ばかり受けさせたてまつりたまふ（若菜下、第七巻437ページ）

紫上の生命にはかえられないと、息絶えられて、源氏は初めて目がさめたのであろう。

こうして、病気平癒の仏事祈願も行ない、紫上の病気は小康を保つようになった。しかし、完全な快復ではない。重病の後は一日も早い正式の出家を、と彼女は願うのである。

⑤のちの世のためにと、（中略）いかでなほ、本意あるさまになりて、しばしもかゝづらはむ命のほどは、おこなひを紛れなくと、たゆみなくおぼし宣たまへど（御法、第九巻19ページ）

出家を許されない状況のもとで、紫上は法華経千部の供養を行ない、その五箇月後、三十数年間にわたる源氏との愛の歓びと哀しみをかみしめつつ、はかなくこの世を去った。

⑥まことに消えゆく露のこゝちして、（中略）かひもなく、明けはつるほどに消えはてたまひぬ（御法、第

九巻74～5ページ）

涙にむせびつつ、源氏は我子夕霧に、紫上の落飾の指揮を命ずる。

⑦仏の御しるし、今はかの暗き道のとぶらひにだに頼み申すべきを、かしらおろすべきよし、ものしたまへ、さるべき僧たれかとまりたる、など宣たまふ（御法、第九巻80ページ）

紫上は死の直後に落飾した。

(8) 浮舟の場合

浮舟は続篇〈薫物語〉のヒロインである。仏教的色彩の濃い続篇ではあるが、出家を全うしたのは彼女一人だけといってよい。彼女の道心は、自殺を決意し、未遂に終わり、横川の僧都達に助けられてから後のことである。

①尼になしたまひてよ、さてのみなむ生くやうもあるべき（手習、第十二巻381ページ）

意識回復後の浮舟が最初に口にしたことばは出家への願いであった。僧都達は病が快復するのならということで、戒だけを授けた。

僧都の母親の尼君は亡くなった娘の代わりにと、浮舟を考えているのである。この死んだ娘の夫であった中将が訪ねてきて、浮舟を見染めプロポーズしたりもする。

しかし、薫と匂宮の愛のはざまで苦しみ悶えて自殺さえしようとした浮舟が、中将の求愛に関心を示す筈がなかった。彼女はただひたすら一日も早い出家を願うばかりである。

②いとむつかしうもあるかな、人の心はあながちなるものなりけり（中略）なほかゝる筋のこと、人にも思ひはなたすべきさまに、とくなしたまひてよ、とて、経ならひてよみたまふ（手習、第十二巻444～5ページ）

男の愛欲の煩悩の火を消すためにも、早く出家したいという。藤壺宮や空蟬に共通した女の悲しい決意である。

しかし、浮舟の場合、中将の存在が直接の動機でないことは、以前からの出家への意志からも明らかである。

③世の中にはべらじ、と思ひたちはべりし身の、いとあやしくて今まではべるを、（中略）つひにえとまるまじく思ひたまへらるゝを、尼になさせたまひてよ、世の中にはべるとも、例の人にて長らふべくもはべらぬ身になむ（手習、第十二巻473ページ）

④例の人ざまならで、のちの世をだにと思ふ心深くはべりしを、なくなるべき程の、やう〳〵近くなりはべるにや、こゝちのいと弱くのみなりはべるを、なほいかで（手習、第十二巻473ページ）

「例の人」（人なみ）でない自分、普通の人生を送ることは許されないのだという。ただひたすら出家をし、後の世だけでも人なみに生きたいというのである。それにしても、「なくなるべき程の、やう〳〵近くなりはべる」というのはどうであろうか。いくら病後だとはいえ、二十二歳の人のことばとしては少々大袈裟である。

ともあれ、尼君の留守に、浮舟は僧都に縋り落飾した。

⑤とみにせさすべくもあらず、皆いひ知らせたまへる事を、うれしくもしつるかなと、これのみぞ仏は、生けるしるしありておぼえたまひける（手習、第十二巻480ページ）

出家の願いを果たしたことを、〈仏の生けるしるし〉と感謝する浮舟の心が悲しく胸をうつ。現世での幸福をいろいろ願ってきたのにもかかわらず、彼女の半生は幸せとはいえなかった。そして今、来世での幸福（それも、そう信ずることで）だけを、と思っているのである。恩愛の情を断ち切った生き方にのみ、「うれしくも」と反応する浮舟の生はどうみても悲しい。

⑥なきものに身をも人をも思ひつゝ捨ててし世をぞさらに捨てつる（手習、第十二巻484ページ）

自殺しようとして〈捨てた世〉を、いま再び出家して〈捨てた〉というのである。

ところで、この浮舟の出家に関しては、もう一つ〈彼女の還俗〉という問題がある。それは物語の最終巻〈夢の浮橋〉において、死んだとばかり思っていた浮舟の生存を知った薫が、横川の僧都に会い、浮舟の還俗を願ったからである。

当時の僧侶は、貴族の庇護によって生活が安定していた。大檀那であるところの権大納言兼右近衛大将源薫の

要望に応えなくてはならない僧都の立場である。僧侶としての本意に悖るのを覚悟で、僧都は浮舟に還俗を勧めた。

⑦御心ざし深かりける御中を、そむきたまひて、あやしき山がつのなかに出家したまへること、かへりては仏のせめそふべきことなるをなむ、承りおどろきはべる、いかゞはせむ、もとの御契あやまちたまはで、愛執の罪をはるかしきこえたまひて、一日の出家の功徳ははかりなきものなれば、なほ頼ませたまへ（夢の浮橋、第十二巻572～3ページ）

作者は、なぜ浮舟の出家を描いたところで物語を閉じなかったのか。この意味は大きいと思う。

『紫式部日記』に記されている著者の道心が最後まで揺れ動いているように、物語中の人物の道心も、最後の人物浮舟まで至り、出家の段階でとどめなかった。

還俗を勧める僧侶のあり方、愛執の人生をあくまで貫こうとする薫の生き方などに、作者の仏教に対する最終的疑問が残されているともいえよう。当時の仏教に対する批判といってもよい。客観的には、それが当時の仏教の限界でもあった。

玉上琢弥氏は次のように述べている。

女君（浮舟のこと、筆者注）は勤行につとめるが、貴族らしく、勤行に執することはないであろう。小君（浮舟の異父弟、筆者注）には会わずとも、母には会うであろう。薫には会わないだろう。そして薫も、無理じいは、例によって、しないであろう。（中略）当時の読者は知っている。尼の生活が必ずしも安全でないことを。（中略）薫の一言で、（中略）いっさいの危険性は解消するであろう。女（浮舟、筆者注）は勤行に専念しうることになる。その魂は救済されるであろうか。そこまで当時は追求しないであろう。（中略）生々世々を重ねて、少しずつ彼岸に近づくことであろうと思う。（中略）物語はそこまでである。物語の追求しうる宗教性はここまでである。[4]

たしかに、当時の仏教の世界はこのようなものであった。そのことが見えていた作者に、仏教で救われる人間が描かれる筈がない。僧都の還俗の勧めにも、堅く心を閉ざして、「世にあるものとも思はざらむ」（第十二巻576ページ）とか、「ありとは知られでやみなむ」（第十二巻576ページ）とか、「知られたてまつらじ」（第十二巻576ページ）などと、孤絶の生を貫こうとする浮舟なのである。彼女の道心は堅固である。それが真実の救いでないにしても、ひたすら彼岸に達しようとしている姿勢である。

岩瀬法雲氏も述べるように、

暗い長いトンネルではあるが、前方にかすかに一点光が見える[5]

ようである。法華経化城喩品によったと思われる、あの和泉式部の歌、

冥きより冥き道にぞ入りぬべきはるかにてらせやまのはのつき（拾遺和歌集、1342番歌）

が想起される浮舟の姿である。

以上が『源氏物語』の主な女性の出家の様相であるが、注目すべきことは、出家した(1)から(7)の人物はすべて源氏と関係のあった女性であり、(8)の浮舟は薫と関係のあった女性であるということである。出家を志した女性達も、①と②と④は源氏の好き心にかかわった女性であるし、⑤は薫の恋人であった。③の落葉宮も、源氏や薫に準ずる主人公である夕霧に愛された女性である。

主人公に愛された女性達が出家している物語、それが『源氏物語』である。

それでは、次に男性で出家した人物を見てみよう。

物語の展開の過程で出家した人物は、朱雀院と源氏と宇治八宮の三人であり、彼らはすべて桐壺院の皇子達である。そして、朱雀院と八宮の末娘は二人とも出家し、姉娘の二人（落葉宮と大君）は出家の志が強かった。

(9) 朱雀院の場合

朱雀院の出家の動機は病気ゆえであった。

朱雀院のみかど、ありしみゆきののち、そのころほひより、例ならず悩みわたらせたまふ、もとよりあつしくおはしますうちに、このたびはもの心細く思しめされて、年ごろおこなひの本意ふかきを（若菜上、第七巻19ページ）

心に重く懸かっていた愛娘女三宮の裳着の式を終えた三日後、院は剃髪した。

御こゝちいと苦しきを念じつゝ、思しおこして、この御いそぎ果てぬれば、三日すぐして、つひに御髪おろしたまふ（若菜上、第七巻75ページ）

重い病床にあっての入道であった。「柳に風折れなし」の言もあるが、病弱であった院は、その後、病気も快復し、五十の賀も無事に終え、〈山の帝〉と呼ばれて「夕霧の巻」（53歳）までは明らかに健在である。

朱雀院出家の意味は、最後まで心に懸かっていた女三宮を源氏に託すという構想、すなわち『源氏物語』第二部の世界が展開されたというところにあろう。

この第二部は、女三宮という新しく登場した女人がいて、初めて起こった事件の連続なのである。紫上の苦悩、柏木密通事件、源氏における老いのテーマ、薫という続篇主人公の誕生等々、すべてが女三宮物語の構想の結果であった。

(10) 宇治八宮の場合

宇治八宮の場合は出家を全うしたとはいえない。その意味では紫上に近似している。

しかし八宮は、物語の中でしばしば〈聖の宮〉とか〈聖〉と記され、その実質仏弟子のさまは、仏道を求めていた薫がわざわざ法の師として仰いだほどである。

薫は、形式的ともいえるプロの僧侶を選ばなかった。実体験の苦悩の裏付けのない彼らの教説よりも、八宮の体験談の方にこそ、より身近な人間的なものを、薫は感じとっていた。

八宮には、夫人の亡くなったあと、心に懸けて見守らねばならぬ二人の娘がいた。大君と中君である。彼女達の存在は、父親に出家することを許さなかった。〈絆し〉のない者だけが出家できたのである。

いつまでも出家できない宮であるが、彼の人となりは、〈聖〉であり、「限りなき御心強さ（道心）」（椎本、第十巻184ページ）といったありさまである。

宮は薫に、娘達のことを依頼し、やがて山寺に籠る。いよいよ死を迎える心準備であろうか。年も大分とっていたし、身体はかなりまいっていた。

宮はいみじうもの心細くおぼえたまひければ、例の静かなる所にて、念仏をも紛れなうせむ、と思して（椎

本、第十巻210ページ）

宮にとって、この世はすでに〈思ひ捨つる世〉（同前）であったのだ。念仏三昧の山寺で、宮は病に倒れた。そして遂に、再び自邸に戻ることなく、この山寺で六十歳あまりの生涯を閉じたのである。

宮にとっては、化儀ともいえる面の入道の式だけが済んでいなかったのであり、実質求道者としての生活は、物語中でも屈指の人である。

ともあれ、八宮という人は、「入道の御ほいは、昔より深くおはせし」（椎本、第十巻224ページ）人であった。道心厚き人だったのである。姿が在俗で心が聖であった彼のことを、〈俗聖〉という。

八宮の出家とは、山寺に籠るために家を出たことであり、文字通りの〈出家〉であった。

(11) 光源氏の場合

最後に、物語全体の主人公である光源氏の場合を見てみよう。

源氏自身の出家の場面は物語に描かれていない。しかし、源氏が出家をしたであろうことは、〈幻巻〉を初めとした幾つかの巻々の叙述からも推測できるし、前にもちょっと触れたように、〈宿木巻〉での、薫の回想譚からも、それは明らかである。

それでは、源氏の出家入道への動機はいったい何であったのか。

〈夕顔巻〉では、夕顔の死に遭遇し無常感が深まり仏へ祈願する。〈若紫巻〉では、「我が罪のほどおそろしう（中略）かうやうなるすまひもせまほしうおぼえたまふ」（第二巻53ページ）と出家を思いやったりする。〈葵巻〉では、妻である葵上の死にあい、「かかるほだしだに添はざらましかば、願はしきさまにもなりなまし」（第二巻435ページ）と出家を願う。

このように、早くから、道心の芽生えていた源氏ではあったが、或る時は若紫が、或る時には子供の夕霧が、そしてまた或る時には東宮（冷泉院）が〈絆し〉となって、道心をみつめ、育てることはあっても、出家にまではいたらなかったのである。

というのも、出家が俗世間の家を出ることであるなら

ば、出るべき俗世間にはあまりにも愛着があり過ぎた。

今年をばかくて忍び過ぐしつれば、今はと世を去りたまふべきほど、近くおぼし設く（幻、第九巻175ページ）

かくして源氏は、俗世間における執着のなくなった時、すなわち、権勢への魅力もなく、女人や肉親への愛着もなくなった最晩年に（準太上天皇という身分であり、三人の子供達は皆安泰、一人は上皇、一人は皇后、一人は大臣、そして最愛の妻である紫上に亡くなられた時に）、出家したのである。

その意味で、〈光源氏物語〉は、主人公光源氏の〈発心から出家へ〉という主題の物語であったともいえるのである。

註

（1）本文の引用は、『源氏物語評釈』（玉上琢弥著、角川書店）による

（2）玉上琢弥氏、『源氏物語評釈』第九巻25ページ

（3）「法華経と日本文学」（『東洋学術研究』別冊〔八〕、昭和五十三年十月）

（4）『源氏物語評釈』第十二巻585～6ページ

（5）『源氏物語と仏教思想』――笠間書院――82ページ

（にしだ ただゆき・創価大学教授）